

第Ⅲ章 恩納村伊武部貝塚

I. はじめに

本貝塚は沖縄本島北西部の恩納村字名嘉真小字伊武部2623番地に所在する、沖縄編年後期の貝塚で、1954年に多和田真淳氏によって発見された。本貝塚は典型的な後期遺跡の一つで、臨海砂丘地に形成されている。遺跡周辺の地形は山原特有の地形に属していて、以西には東シナ海が広がり、背後にはすぐ丘陵が迫って、この間のわずかな砂丘地を利用して本貝塚も、そして現在の集落も営まれている。砂丘地は南北に細長くのび、遺跡のすぐ北を溝状のヤーシー川が東シナ海に注いでいる。

ここに紹介する資料は、筆者の一人高宮が1960年代初めごろ所用で那覇から名護へ向かう途中、本貝塚が採砂工事によって破壊され

ているのに気づき、一時下車して表採したものである。遺跡地は採砂によって大きく抉られ、凹地周辺の壁面には一部を除いて遺物包含層は認められなかった。包含層が残存していたのは嘉手納氏の住宅周辺で、この住宅のお陰で破壊から免れたようなものである。暗褐色の遺物包含層は厚さ30センチ前後、地表下30～40センチのところに形成され、家屋直下の砂層に延び、その東端は国道58号線の道路下に及ぶものと推察された。したがって、嘉手納氏宅から国道にかけての地域には遺物層が残存しているものと思われる。遺物は特に包含層露頭部の宅地周辺に散在していたが、国道東側の畑地にもわずかながら散布しており、そこでも採集を行った。

II. 表採遺物

A. 土器

土器は破片が100点表採され、その内訳を第1表に示した。ほとんどがいわゆる後期系の土器で、縄文時代に属するものは3点だけであった。以下に遺物の概要を記す。

イ) 縄文時代の土器

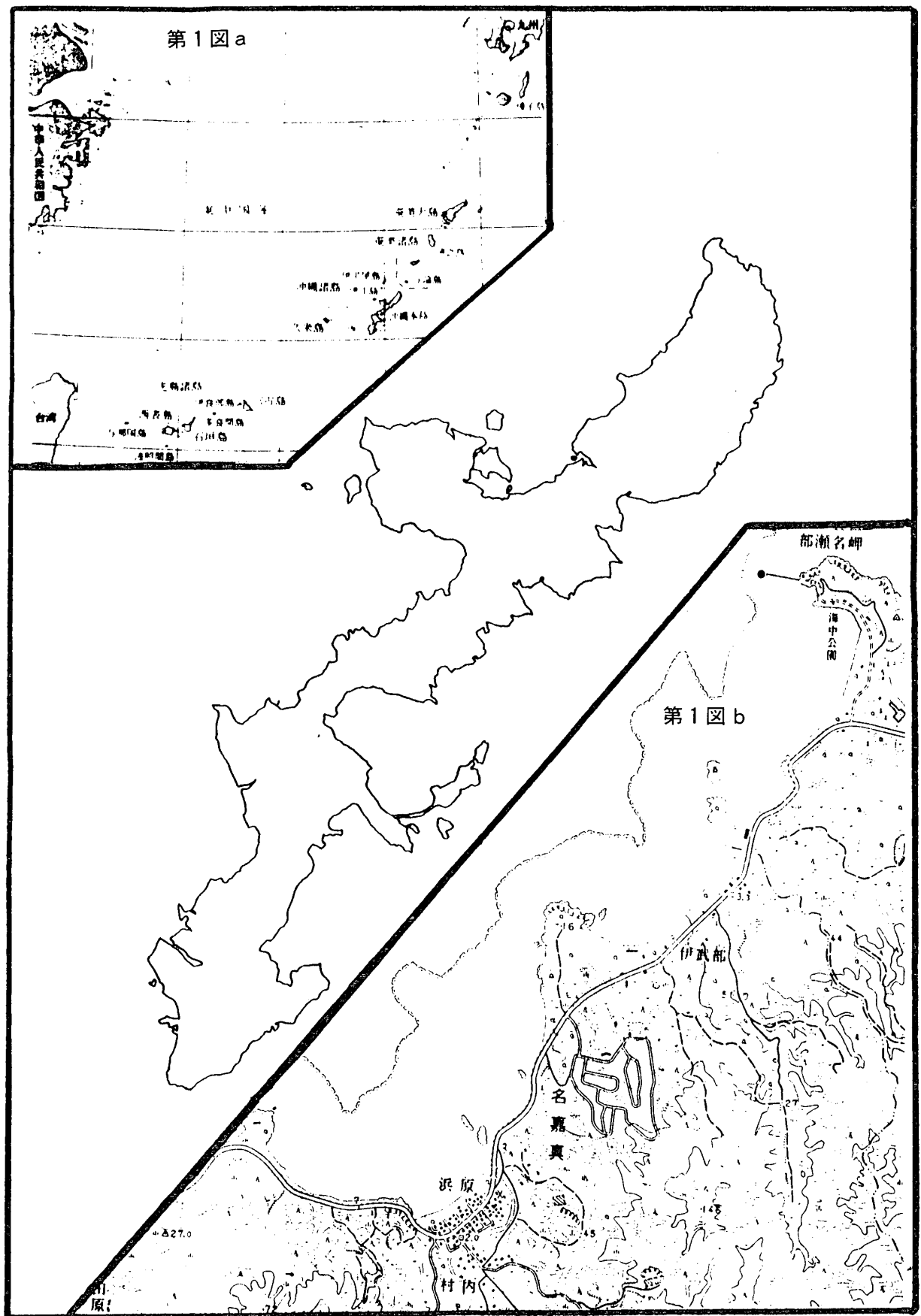
本時代に属するものは3点で、口縁部が1点と胴部が2点である。器厚や器面調整に関する観察を第2及び第3表にまとめた。

器種

器種の判明するものは口縁の1点だけで、この1点は深鉢形に属する。

深鉢形土器

第2図1（第I図版A1）は口縁部の破片である。口縁部は直線的に開き、口唇部の断面はやや丸みを帯びる。口縁部を上面からみると湾曲がほとんど認められず直線的で、そのため口径の計測は不能。器面はナデ調整を行なっている。器壁の厚さは6～7mmである。



第1図 伊武部貝塚の位置 a:「日本の古代遺跡47沖縄」保育社1993
b:「沖縄県地形図」国土地理院1976より

焼成は普通だが次項の後期系土器に比べると脆い。胎土には石英やチャートのほか、炭化物と思われる黒色の微砂粒（注1）などが多量見受けられ、器面に露出して容易に観察できる。器色は表裏面は赤褐色で、胎土中央部は一部黄褐色を呈する。

表1 伊武部表採土器一覧表

部 位 時 期	口 縁	胴 部	底 部	合 計
縄 文 系	1	2	0	3
いわゆる後期系	17	76	3	96
不 明	1	0	0	1
合 計	19	78	3	100

表2 縄文系土器の器厚

厚 さ 部 位	7 mm	8 mm	9 mm
口 縁 部	1	0	0
胴 部	0	1	1

表3 器面調整（縄文期3点）

調整痕 表裏	ナ デ	不 明
表	2	1
裏	2	1

有文胴部破片

同図2（第I図版A2）は有文の胴部片である。現破片には幅約9mmの横位の凸帯が一条認められ、凸帯上には単篋工具による長さ約5mmの刻文が右から左へ比較的密に施されている。器壁の厚さは約9mmで、凸帯部は11mm前後の厚さがある。胎土には石英やチャートが多量に混入され、器面でも容易に確認できる。器面はナデ調整を行なっている。器色は

表裏面、胎土中央部とも赤褐色で、焼成は普通であるが、前述の土器同様、後期系土器に比べると脆い。

あと1点は胴部の小破片で器種は不明だが、器色・胎土混入物・厚さ・焼成等が、同図2と一致する。小破片のため図示を省略した。

ロ) いわゆる後期系土器

本期に属するものは97点あり、うち口縁部は18点、底部は3点で、残りは有文1点を含む胴部片である。

器厚でみると、後期に普通に見られる6mm前後の厚さを有するものと、4mm以下の薄手のものとは分類できる。後者は厚さだけでなく、器面調整等においても大当原遺跡上層のものに類似し（注1）、器面は磨きがかかっている若干光沢を有する。以上の特徴により、本文では後期系土器を下記2類に分けて記述する。

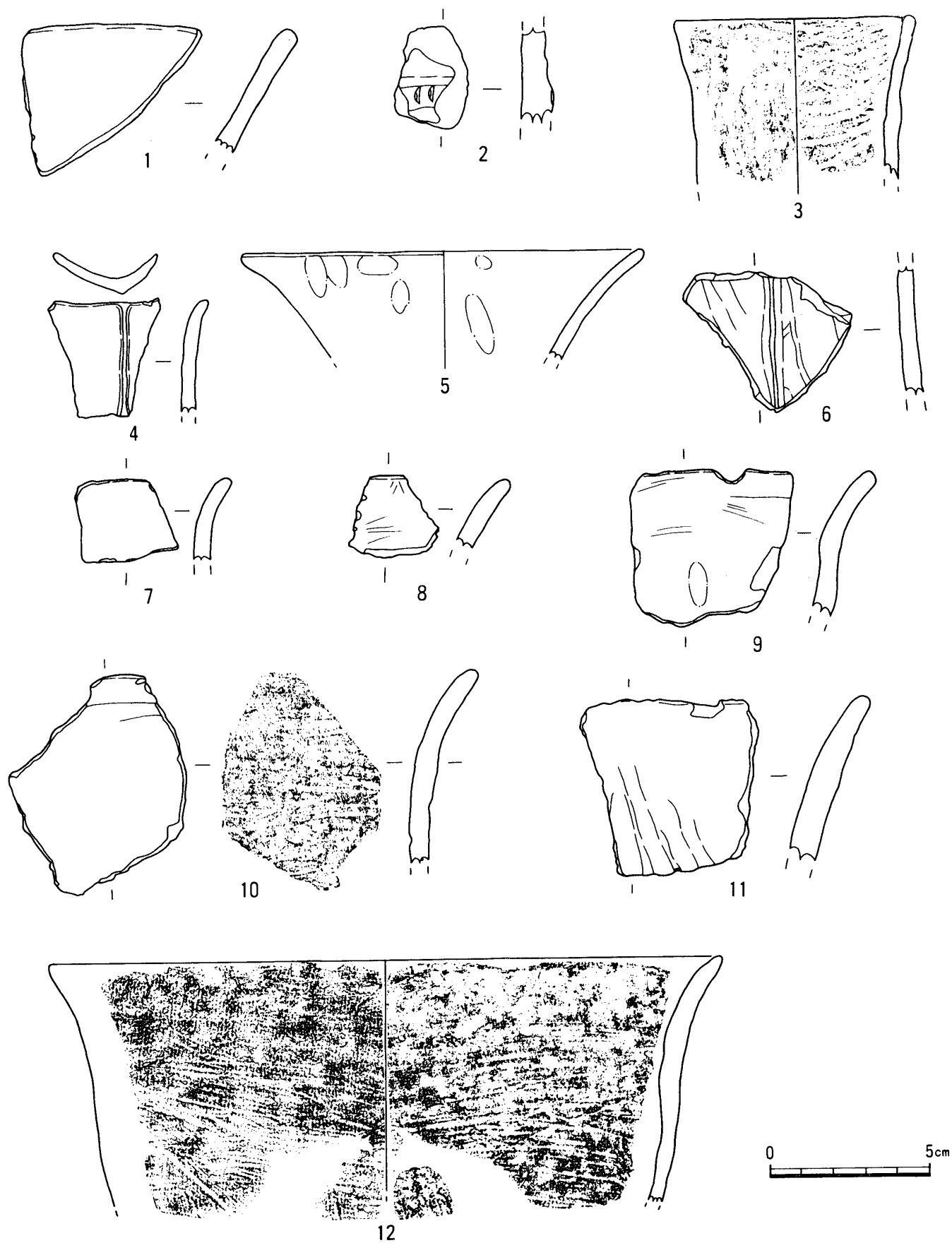
(1) I類土器

これに分類されるものは厚さ4mm以下の薄手のもので、13点ある。口縁破片が3点、他は胴部の破片。底部は得られていない。口縁破片のうち2点は壺形で、他の1点はラッパ状に開く器形に属している。

壺形土器

口縁部の形状からみて、壺形と確認できるものは第2図3と4の2点である。

第2図3（第I図版A3）は口径約7.4cmの長頸の壺形土器の口縁破片である。頸部から上端にかけて外反し、口唇部を薄く尖り気味に形成する。器面は篋によって、表面では



第2図 伊武部貝塚表採の土器

縦位に、裏面では横位にやや乱雑に調整が施されている。前者は直線的だが、後者は弧状を呈し上向きの構図をとる。器壁の厚さは4 mm前後と薄手だが、焼成は良好で固い。胎土には石英の混入が認められる。器色は表裏面、胎土中央部とも茶褐色である。

同図4（第Ⅰ図版A4）は長頸の有稜壺形土器の口縁部片で、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁部には縦位に微弱な隆線が一条認められる。口縁の上面観は方形を呈すると見られるが、口径の計測は不能。口唇部の断面は上端を細く形成する。器面は表裏面ともナデ調整を行っており、磨いたような艶がある。器壁の厚さは3～4 mmで、頸部に近づくにつれ厚みを増す。胎土には石英・チャートのほか、千枚岩が認められる。器色は表裏面、胎土中央部とも橙褐色である。焼成は良好で、やや硬質である。

ラッパ状に開く口縁

同図5（第Ⅰ図版A5）は口縁がラッパ状に大きく外反する器形で、口径は約12.6 cmである。口縁部以下の形態が不明のため器種は推定できないが、口縁部が大きく開く特殊な器形に属している。これまでこの種の器形の報告がなく、新出のタイプと考えられる。器面は表裏面ともナデ調整を行っており、口縁部周辺には表裏面とも調整の際の指頭痕が残る。器壁の厚さは約4 mmと薄手であるが、焼成は良好で固い。口唇部の断面は舌状の頂部を軽く押したような平坦面が形成される。胎土には石英やチャートが混入されている。器色は表裏面、胎土中央部とも赤褐色である。

a) 胴部破片の諸特徴

1. 器厚

器厚については、第4表に示した通りである。

前述したように、このⅠ類に分類される土器の器厚は約4 mm以下で、いわゆる後期に一般的に見られる土器に比べかなり薄く、大当原上層タイプに類似する。また、器厚の計測に際しては、胴部の一番厚いところを対象とした。

表4 いわゆる後期土器Ⅰ類の器厚

厚さ 部 位	3 mm	4 mm	合 計
口 縁 部	0	3	3
胴 部	2	8	10
底 部	0	0	0
合 計	2	11	13

2. 胎土混入物

胎土の混入物は石英や黒色の微砂粒が少量確認できる。しかし、後述するⅡ類土器よりも混入物の器面への露出が少なく、確認するのは困難である。

3. 焼成

焼成は良好で全体的に吸水性は弱く、硬質の土器である。

4. 器色

器色は第5表に示す通りである。

器色は大きく橙褐色・暗褐色・黒褐色に分けられる。表裏面・胎土中央部ともに同色のものが多く、中には煤けて黒みを帯びるものもある。

第 5 表 I 類土器胴部の器色による分類(個数計10点)

表裏・胎土 中央部 器色	表 面	裏 面	胎 土 中 央	合 計
橙 褐 色	6	7	7	20
暗 褐 色	1	1	1	3
黒 褐 色	1	1	1	3
煤が付着し不明なもの	2	1	1	4
合 計	10	10	10	30

b) 文様

1. 器面調整

器面調整については第 6 表に示す通りである。

器面が荒れて確認できないものを除けば、表面はほとんどナデ調整を行っており、磨いたような光沢がある。裏面には刷毛目様の調整痕やヘラによる調整痕が残るものもみられる。

2. 文様 (有稜土器)

このグループはほとんどが無文であるが、第 2 図 4 は口頭部に縦位の微隆線が見受けられる。

表 6 いわゆる後期系 I 類土器の器面調整(13点)

調整痕 表裏	擦 痕	ナ デ	ヘ ラ	不 明	合 計
表	2	9	2	0	13
裏	4	3	3	3	13
合 計	6	12	5	3	26

(2) II 類土器

これに分類されるものは、いわゆる後期に一般的に見られるもので、本遺跡のものでは

器厚が 6 mm 前後に集中する(第 9 表)。口縁破片が 13 点、底部破片が 3 点、他は有文 1 点を含む胴部の破片で、総計 83 点得られている。口縁破片 13 点のうち、器種の把握できるものは甕形の 10 点で、他は小破片のため器種の確定は困難だが、大部分は甕形に属するものと考えられる。

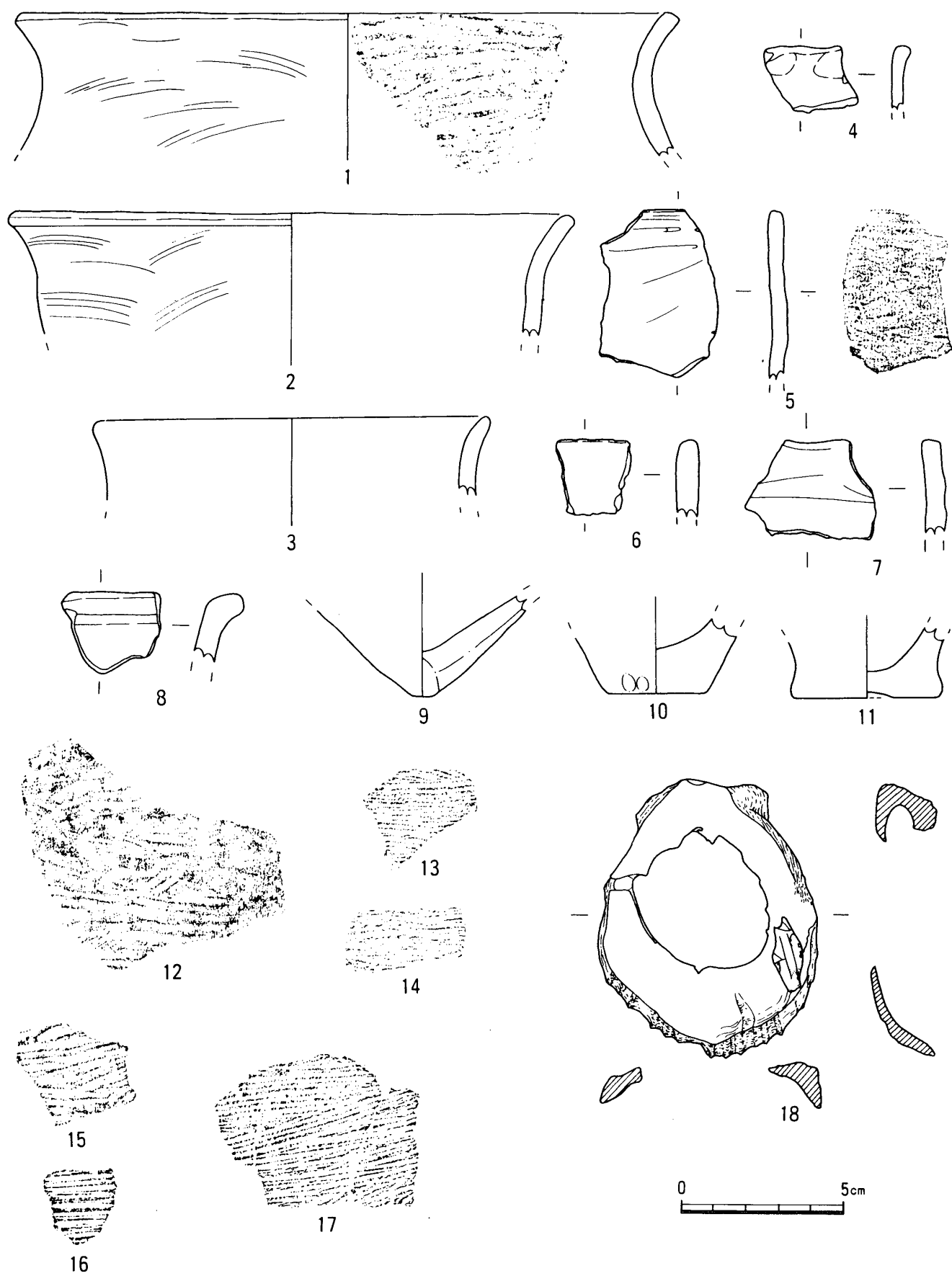
a) 器種・器形

1. 口径

口縁破片 13 点のうち、口径の推算可能なものは 4 点である。うち口径が 20cm をこえる大型の土器は第 2 図 12 (口径約 21.2cm) と第 3 図 1 (口径約 20.6cm) の 2 点である。口径が 15cm 前後の中型の土器は同図 2 (口径約 16.6cm) と同図 3 (口径約 12.2cm) の 2 点である。推算可能なもののうち、口径が 10cm 以下になるような小型の土器は得られていない。

2. 口縁部の形状

口縁部の形態は 3 種に大別できる。1 つは口縁部がやや直線的に開く器形で、第 2 図 11 (第 I 図版 A 11) はこれに属する。二番目は外反するタイプで、口縁上部で外反するサブタイプと頸部が大きく湾曲するサブタイプに細分される。前者は第 2 図 7 ~ 10・12 (第 I 図版 A 7 ~ 10・12)、第 3 図 2 ~ 4 (第 II 図版 A 2・3・5) など、このタイプが最も多い。後者は第 3 図 1 (第 II 図版 A 1) にみられるもので、やや均整の取れた湾曲を示す。今回の採集品でこれに属するものはこの 1 点のみである。第 3 のタイプは直口を呈するもので、第 3 図 5・6 (第 II 図版 A 4・6) の 2 点がこれに属する。形態の把握ができない



第3図 伊武部貝塚表採の土器及び貝器

ものが1点ある。第3図7（第Ⅱ図版A7）
に示す1点で、直口に近いが、わずかに丸み
をもって内弯する。この種の口縁器形は、こ

の時期には稀である。

口縁部の形状を第7表にまとめた。

表7 いわゆる後期系Ⅱ類土器の口縁部形態による分類

器 種		器種不明	合 計	甕 形	比率(%)
形 態	やや直線的に開くもの	0	2	2	15%
	外 口縁上部で外反するもの	2	6	4	21%
反	頸部が大きく湾曲するもの	0	1	1	7%
直 口		1	3	2	23%
不 明(内弯?)		1	1	0	7%
合 計		4	13	9	—



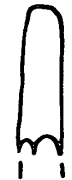

* 比率は端数切り捨てのため、100%にはならない。

3. 口唇部の断面形状

口唇部の断面形状は、第8表の4種に大別
できる。(i)は口唇部の先端が細く尖るタイ
プ、(ii)は口唇部がやや丸みを帯びるタイプ、
(iii)は口唇部が方形をなすタイプ、(iv)は口

唇部がやや膨らみを持つタイプで、(iv)のタ
イプは第3図4（第Ⅱ図版A2）の1点のみ
である。最も多いのは(ii)の口唇部がやや丸
みを帯びるタイプで6点である。

表8 口唇部の断面形態による分類

タイプ名		i タイプ	ii タイプ	iii タイプ	iv タイプ	—
分類	タイプ名					
	口 唇 部 形 態					合 計
個 数		3	6	3	1	13

4. 器厚

器厚は第9表の通りである。

前述のように、このⅡ類に分類される土器
の器厚は6mm前後のものが主流を占める。稀

に1cmちかい胴部片も見受けられるが、胴中
央部の破片というよりは底部付近の資料であ
ろうと考えられる。

表9 いわゆる後期系Ⅱ類土器の器厚

厚さ 部位	5 mm	6 mm	7 mm	8 mm	9 mm	10 mm	13 mm	合 計
口 縁 部	6	3	2	1	1	0	0	13
胴 部	30	26	8	1	1	1	0	67
底 部	0	0	0	1	0	0	2	3
合 計	36	29	10	3	2	1	2	83

また、器厚の計測に際し、口縁部・胴部は一番厚いところを対象とし、底部は底径の中心部の厚さを計測した。

5. 胎土混入物

混入物は石英、チャート、千枚岩、赤色粒が確認される。石英・チャートを混入するのが最も多く、ほとんどの土器に見られる。また、いわゆる後期系の土器は縄文時代の土器に比べ、混入物の器面への露出が少ないことが一般的に知られているが、本遺跡の土器も例外ではなく、混入物を器面で確認するのは困難である。

6. 焼成

焼成は全体的に良好で硬質の土器が多いが、稀に器表面が粗く吸水性の強い土器も見られる。しかし、後者も前述した縄文時代の土器に比べると固い。第2図11（第Ⅰ図版A11）や第3図6（第Ⅱ図版A6）は後者に属する。

7. 器色

器色は大きく橙褐色・暗褐色・黒褐色・黄褐色に分けられる。表裏面・胎土中央部とも同色の場合が多い。胴部片には煤けて黒みを帯びるものもある。

橙褐色に分類されるものは、第2図9・

10・12、第3図1・2、5～7の計8点である。橙褐色よりやや黄色味を帯びるものを黄褐色としたが、これに分類されるのは第2図7・8、同図11、第3図3の4点。第3図4は表裏面とも煤がついていて器色は確認できない。図示を省略した他の遺物については第10表に示した。

第10表 Ⅱ類土器胴部の器色による分類(個数計67点)

器色	表裏・胎土 中央部	表 面	胎土 中央	裏 面	合 計
橙 褐 色		45	40	47	132
暗 褐 色		1	9	7	17
黒 褐 色		1	10	7	18
煤が付着し不明なもの		17	4	3	24
黄 褐 色		3	4	3	10
合 計		67	67	67	201

b) 文様

1. 器面調整

器面調整は第11表に示す通りである。擦痕やナデ調整を行なうものが圧倒的に多く、ヘラによる調整痕や刷毛目様の調整痕を持つものが全体の24%弱見受けられ、本土器の特徴としてあげられる（第3図12～17・第Ⅳ図版12～17）。また、器面調整の統計資料を作成するにあたり、最終段階の調整痕を表示した。

表11 いわゆる後期系Ⅱ類土器の器面調整(80点)

調整痕 表裏	擦 痕	ナ デ	ヘ ラ	刷 毛	不 明	合 計
表	27	38	9	2	4	80
裏	30	19	13	14	4	80
合 計	57	57	22	16	8	160

※刷毛と表示したものは、刷毛目様の調整を有するもの。

2. 有稜土器

第2図6（第Ⅰ図版A6）は有稜土器の胴部破片である。現破片には微弱な隆線が縦位に一条認めれる。器表面はヘラによる調整を行っており、隆線と平行して縦位にヘラの調整痕が確認できる。裏面は刷毛目様調整のあと撫でており、一部に横位の刷毛目様痕が残る。器壁の厚さは約5mmで、隆線部は約7mmである。胎土には石英・チャートのほか、焼土と思われる赤色の砂粒が確認できる。器色は表面がやや暗褐色で、胎土中央部・裏面は橙褐色である。焼成は良好で、硬質の土器である。

c) 底部

底部は全部で3点得られている。内訳は尖底1点、平底1点、くびれ平底1点である。底部資料についてはどの器種に属するのか判別できないため、ここでは一括して扱う。

第3図9（第Ⅱ図版A9）は尖底の土器である。器壁の厚さは約8mmで、底部へ向けて厚みを増し、底部中央で約13mmを測る。底面からの立ち上がりはやや直線的で、胴部の上方へ向けて開く形態である。器面はナデ調整を行っており、内面の中央部付近には指頭による凹凸が確認できる。胎土混入物には石英や千枚岩が認められる。焼成は良好で、硬質の土器である。

同図10（第Ⅱ図版A10）は底径約3cmの小形の平底で、尖底を押し潰したような形状をしている。器壁の厚さは約10mmで、底部中央の厚さは約13mmである。器面はナデ調整を行っており、底面からの立ち上がりの部分には調整の際の指圧痕が残る。胎土混入物には

石英やチャートが認められる。焼成は良好で、硬質の土器である。

同図11（第Ⅱ図版A11）は底径約4.4mmのくびれ平底の土器である。底中央部の外面は上げ底様の窪みを作る。器壁は約5mmで、底部の中央部は約8mmである。外面ではナデ調整が確認できるが、内面は荒れていて調整痕は確認できない。胎土混入物にはチャートや石英が認められる。焼成は良好で固い。

ハ) 時期不明の土器

これに分類されるのは第3図8（第Ⅱ図版A8）の1点である。器種は深鉢か甕形に属する。

第3図8は無文の口縁部破片である。口縁部をくの字に屈折させており、口唇部の断面形状は丸みを帯びる。小破片のため、口径の計測は不能。器面は表裏面とも擦痕による調整のあと撫でており、裏面には一部横位に擦痕が残る。器壁の厚さは約5～7mmで、胴部よりも口縁部が若干厚い。胎土にはチャートや石英が確認できる。焼成は良好でやや硬質の土器である。

口縁部をくの字に屈折させるタイプは、いわゆる後期系の土器にも見られるが、器色は表裏面・胎土中央部ともに赤褐色で、縄文系の第2図1や2に類似する。また、胎土はいわゆる後期系土器より若干吸水性が強い。しかし、混入物の器面への露出は縄文期の土器に比べ少ない。以上のことからこの遺物については、当面時期を保留する。

B. 有孔二枚貝

ここに取り上げるものは第3図18（第Ⅱ図

版A18)の1点で、メンガイ類の中央部に孔を穿ったものである。殻頂部から腹縁にかけて成長線から割れていて、整形時の粗孔の状態にあり、一部石の付着が見受けられる。研

磨加工は施されていない。孔の長径は約4.2cm、短径は約3.9cmであり、孔の平面形はほぼ円形である。重量は49g。貝輪の未成品と考えられる。

Ⅲ. おわりに

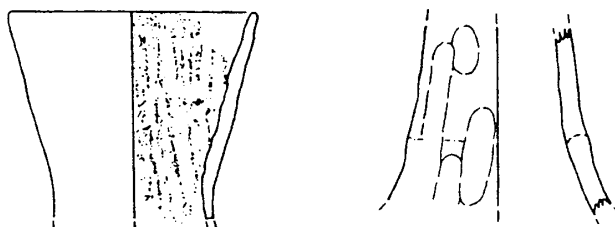
伊武部貝塚は南北約1kmにおよぶ長大な砂丘地に立地しており、遺跡の範囲も東西約50m、南北約200mと広範囲にわたる。現在、遺跡の中心部を国道58号線が通っており、遺跡はこの国道によって2分された形になっている。これまで、発掘調査は1981年、82年と2度にわたって行なわれており、1981年と1983年に調査概報(註2)と調査報告書(註3)がそれぞれ沖縄県教育委員会から発行されている。同報告によると伊武部貝塚は暫定編年の前期から後期にまたがる複合遺跡であるが、前Ⅳ期(縄文後期)に中心があり、同期の奄美系土器である嘉徳Ⅰ式・面縄東洞式・面縄西洞式・面縄前庭式などが伊波式土器と共伴して発見されている。かつては前Ⅴ期(縄文晩期)やいわゆる後期(弥生～平安並行期)の層もあったらしいが破壊が進んでおり、後期の層は完全に破壊された状況にある。

今回報告の表採資料は、暫定編年の後期に属する土器が大多数を占め、また少量の縄文系土器と1点の有孔二枚貝が採集された。いわゆる後期に属する土器は器壁の厚さで2類に分類され、Ⅰ類は器壁の厚さが3mm～4mmの比較的薄手のもの、Ⅱ類は6mm前後の後期に一般的に見られるものである。以下に概要をまとめる。

Ⅰ類土器

Ⅰ類土器の器厚は前述のように3～4mmで、器形は口縁破片からすると壺形と器種不明のラッパ状口縁の二種が認められる。その他無文胴部の小破片も10点得られている。器面は主にナデ調整を行なっており、鈍い光沢を有するものが比較的多く見られるが、ヘラによる調整痕が明瞭に残るものも確認できる。

Ⅰ類土器の特徴は読谷村大当原貝塚上層タイプの土器と器厚・器形・器面調整などが類似していることである(第4図)。大当原貝塚出土の土器については概報が出ており(註1)、それによると器厚は5.5mm以下と比較的薄手で、器形は深鉢形と見られるものと壺形の2種が見受けられる。前者は1点だけで器種ははっきりしないが口縁は内弯型に属しており、碗形かキャリパー状の器形が想定されている。



第4図 大当原遺跡上層出土の土器(註1より)

伊武部貝塚では深鉢形と確認できるものは

得られてない。したがって、深鉢形については比較研究できる状態にない。壺形は大当原貝塚で3点、本貝塚で2点特徴的な口縁破片が得られている。器形上若干の相違が認められるものの、いずれも頸部から口縁部へ向けて開くタイプに属している。この種の器形を有する壺形はこれまで出土例が極めて少なく、新出のタイプに属する。

本貝塚出土の第2図5は口縁が大きく外反するタイプであるが、頸部以下が欠け、器種の判定は困難である。現状からすると深鉢形になる可能性は少ないと思われる。

以上のように本貝塚のⅠ類土器と大当原貝塚の上層タイプとは製作・焼成技術等の上で共通する点が多く、器種・器形についても第2図5を除くと壺形土器に見られるように共通する要素が多い。ただ、深鉢形については今のところ比較資料が少なく類似点や相違点を明示できないが、今後の課題として注意していきたい。

Ⅱ類土器

Ⅱ類に分類された土器は器厚が5mm以上のもので、6mm前後のものが主流である。器形・器厚・その他の特徴は沖縄編年の後期土器に一般的に見られるものである。器種は甕形がほとんどで、壺形と確認できるものは得られていない。文様は稜線を縦に一条もつ土器が1点確認されているものの、残りは全て無文である。この時期に土器が無文化する傾向にあることはこれまでの調査で確認されており、本貝塚もその例にもれない。採集された資料はいずれも破片で全形の伺えるものはなく、口縁部の図上復元が可能なものも4点と限ら

れている。器面調整はナデが多く、擦痕やヘラ磨き、刷毛目様の器面調整(第3図12~17・第Ⅱ図版B12~17)なども確認できる。

刷毛目様の器面調整については、鹿児島大学の本田道輝氏から「条痕・刷毛目に類似する。」等のご所見を戴いたが(注2)、資料が小破片のため判然としなかった。今後類例の増加が望まれる。

以上の資料からみて、破壊される以前の本貝塚は縄文後期以降、沖縄編年の後期前半、つまり弥生時代に相当する時期に比定できる複合遺跡であったと考えられる。

《註文献・注釈》

註1 高宮廣衛・知念勇他「読谷村大当原貝塚発掘調査概報」『読谷村歴史民俗資料館紀要』第17号、沖縄県読谷村歴史民俗資料館編、1993年

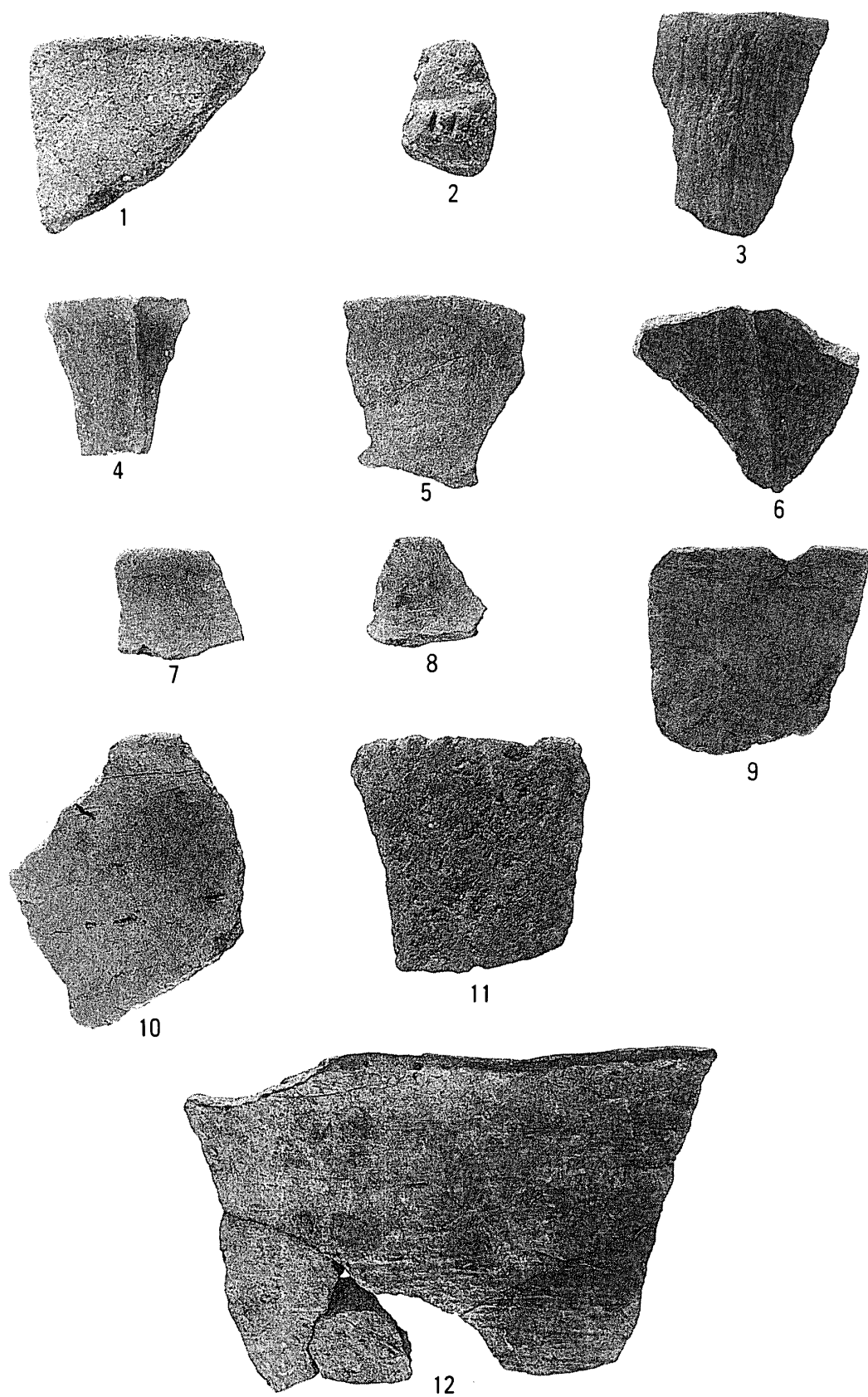
註2 當眞嗣一・上原静他『伊武部貝塚発掘調査概報』沖縄県教育委員会、1981年

註3 當眞嗣一・上原静他『伊武部貝塚発掘調査報告書—遺構・貝製品・石器・貝殻編—』1983年

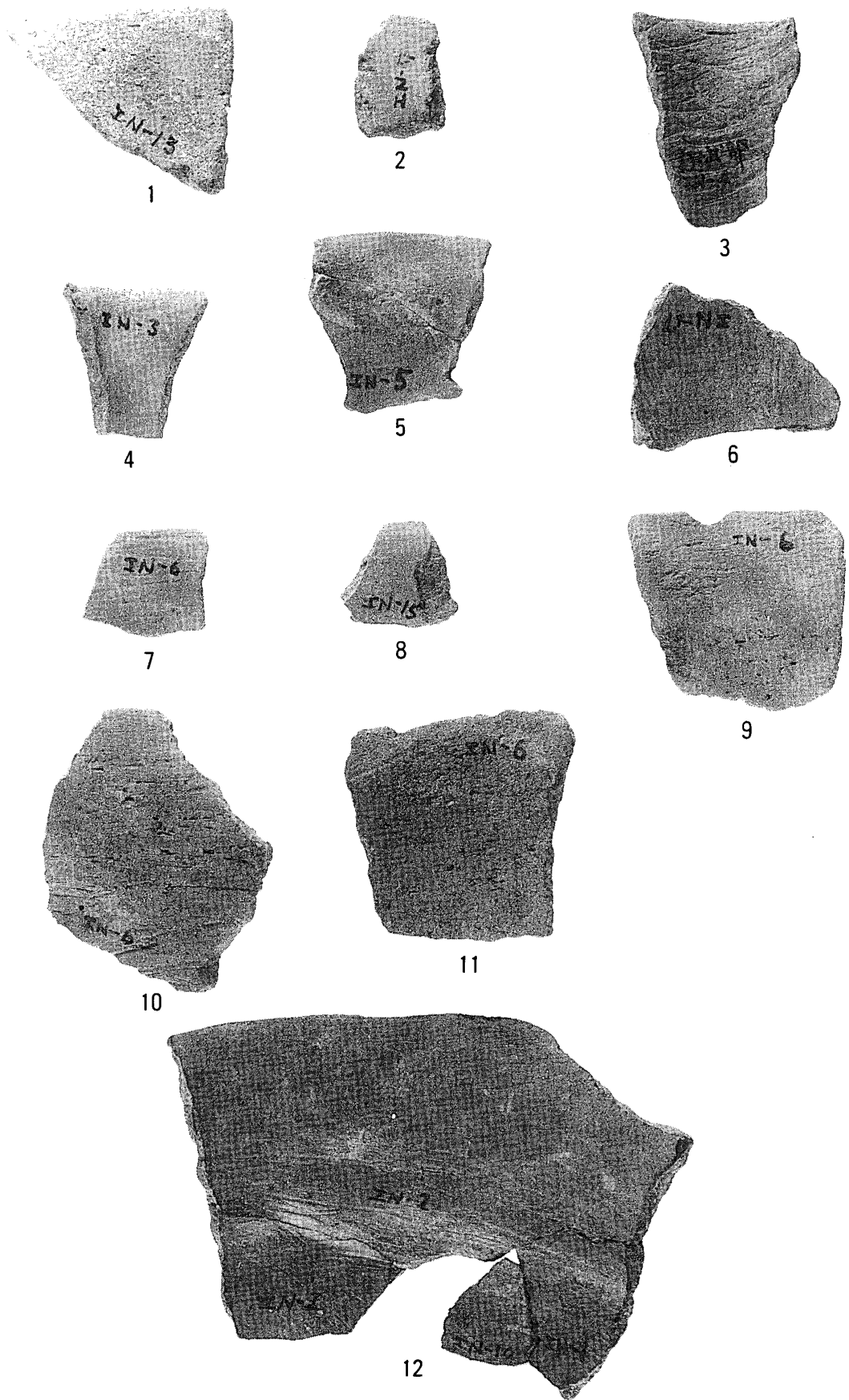
注1 テンパーの石質については、大城逸朗氏に同定して戴いた。

注2 鹿児島大学考古学研究室において本田道輝氏に同定して戴いた。

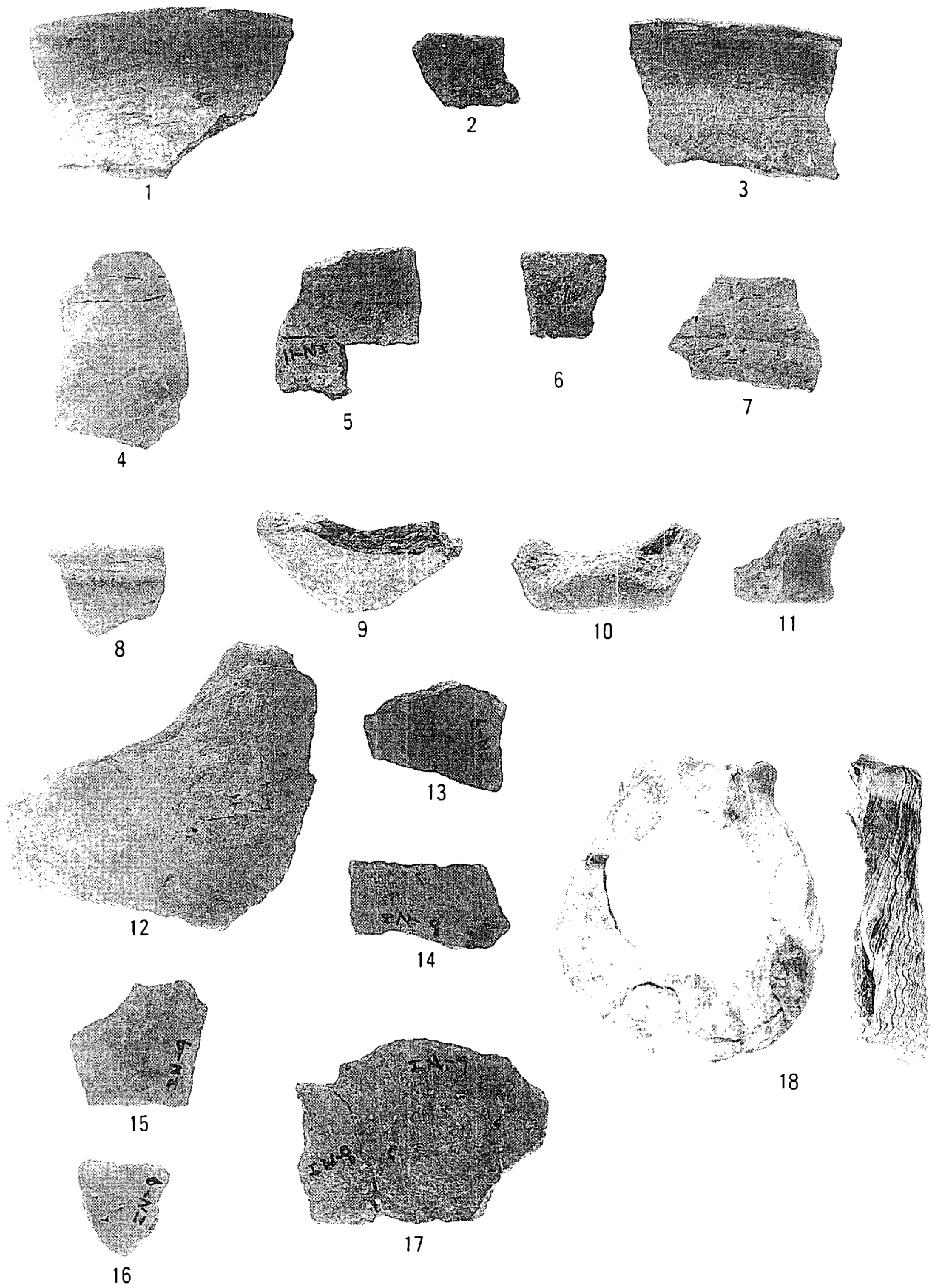
以上の方々に厚くお礼を申し上げたい。



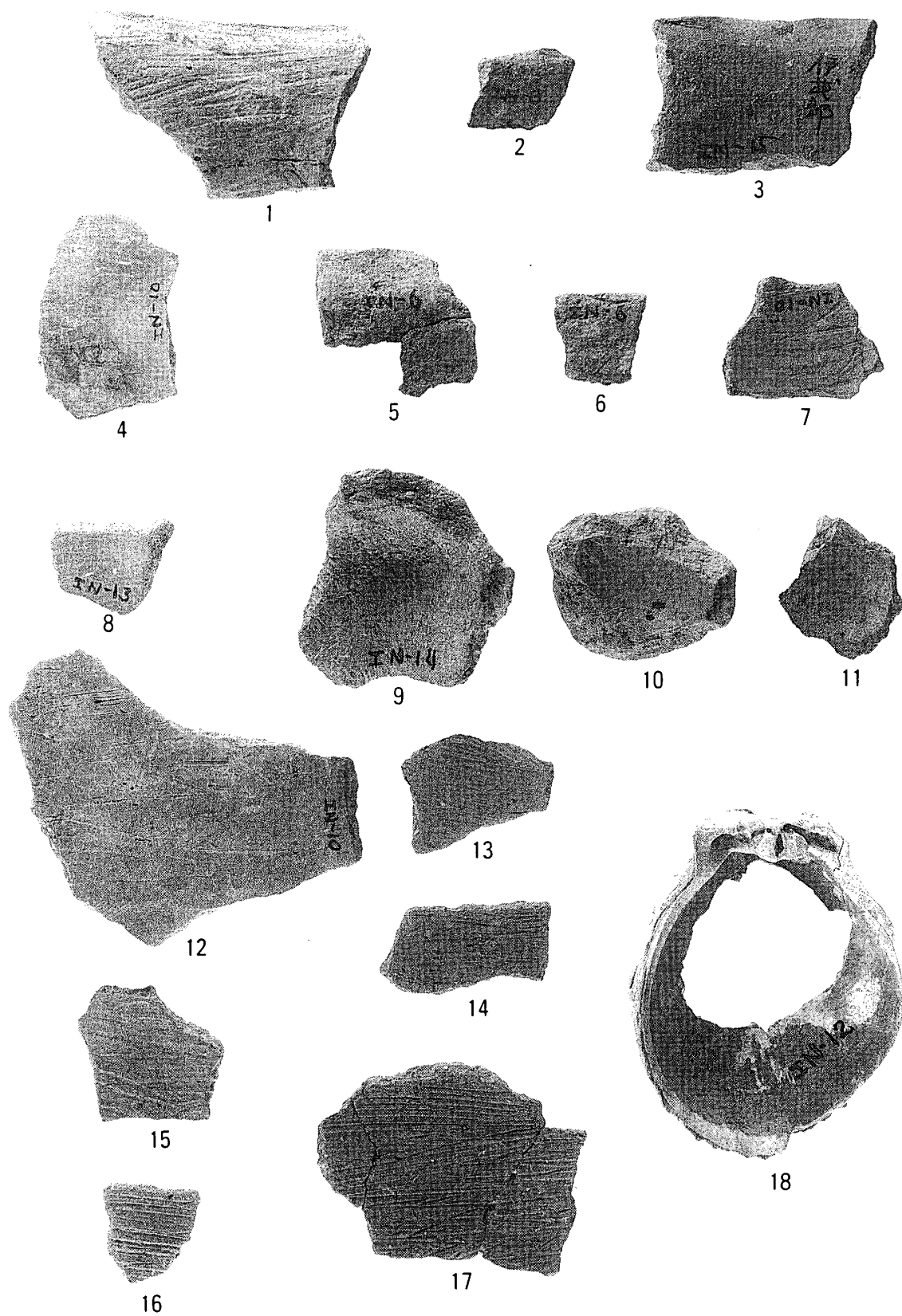
第 I 図 A 伊武部貝塚表採の土器(表面)



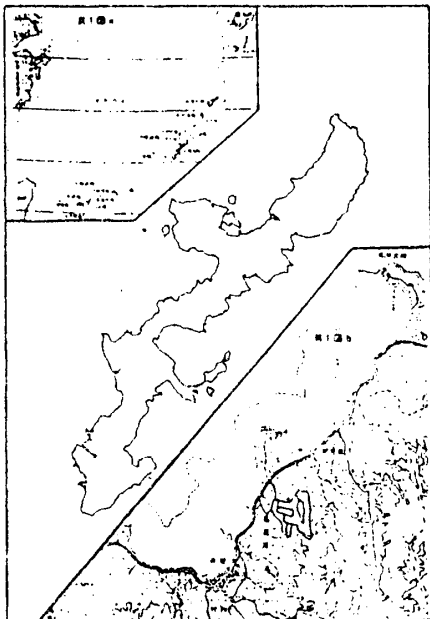
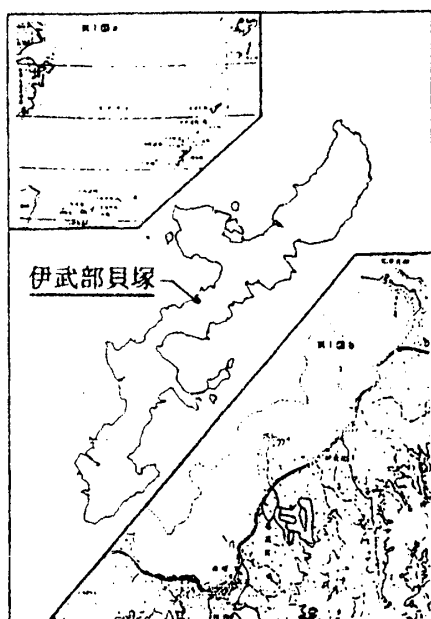
第 I 図 B 伊武部貝塚表採の土器(裏面)



第II図A 伊武部貝塚表採の土器及び貝器(表面)



第II図B 伊武部貝塚表採の土器及び貝器(裏面及び底部上面)

ページ	訂正箇所	誤	正																																																		
30	表7の2～4、 6・7の図版番号	<table><tr><td>2</td><td>第9図1 第Ⅶ図版A・B-1</td><td>深鉢形</td><td>約10.4cm</td><td>I類1</td></tr><tr><td>3</td><td>第9図2 第Ⅶ図版A・B-2</td><td>深鉢形</td><td>約11.2cm</td><td>I類1</td></tr><tr><td>4</td><td>第9図6 第Ⅶ図版A・B-6</td><td>深鉢形</td><td>約11.8cm</td><td>Ⅱ類</td></tr><tr><td>6</td><td>第9図5 第Ⅶ図版A・B-5</td><td>壺形</td><td>約4.6cm</td><td>I類</td></tr><tr><td>7</td><td>第9図14 第Ⅶ図版A・B-14</td><td>壺形</td><td>約4.1cm</td><td>I類</td></tr></table>	2	第9図1 第Ⅶ図版A・B-1	深鉢形	約10.4cm	I類1	3	第9図2 第Ⅶ図版A・B-2	深鉢形	約11.2cm	I類1	4	第9図6 第Ⅶ図版A・B-6	深鉢形	約11.8cm	Ⅱ類	6	第9図5 第Ⅶ図版A・B-5	壺形	約4.6cm	I類	7	第9図14 第Ⅶ図版A・B-14	壺形	約4.1cm	I類	<table><tr><td>2</td><td>第9図1 第Ⅶ図版A・B-1</td><td>深鉢形</td><td>約10.4cm</td><td>I類1</td></tr><tr><td>3</td><td>第9図2 第Ⅶ図版A・B-2</td><td>深鉢形</td><td>約11.2cm</td><td>I類1</td></tr><tr><td>4</td><td>第9図6 第Ⅶ図版A・B-6</td><td>深鉢形</td><td>約11.8cm</td><td>Ⅱ類</td></tr><tr><td>6</td><td>第9図5 第Ⅶ図版A・B-5</td><td>壺形</td><td>約4.6cm</td><td>I類</td></tr><tr><td>7</td><td>第9図14 第Ⅶ図版A・B-14</td><td>壺形</td><td>約4.1cm</td><td>I類</td></tr></table>	2	第9図1 第Ⅶ図版A・B-1	深鉢形	約10.4cm	I類1	3	第9図2 第Ⅶ図版A・B-2	深鉢形	約11.2cm	I類1	4	第9図6 第Ⅶ図版A・B-6	深鉢形	約11.8cm	Ⅱ類	6	第9図5 第Ⅶ図版A・B-5	壺形	約4.6cm	I類	7	第9図14 第Ⅶ図版A・B-14	壺形	約4.1cm	I類
2	第9図1 第Ⅶ図版A・B-1	深鉢形	約10.4cm	I類1																																																	
3	第9図2 第Ⅶ図版A・B-2	深鉢形	約11.2cm	I類1																																																	
4	第9図6 第Ⅶ図版A・B-6	深鉢形	約11.8cm	Ⅱ類																																																	
6	第9図5 第Ⅶ図版A・B-5	壺形	約4.6cm	I類																																																	
7	第9図14 第Ⅶ図版A・B-14	壺形	約4.1cm	I類																																																	
2	第9図1 第Ⅶ図版A・B-1	深鉢形	約10.4cm	I類1																																																	
3	第9図2 第Ⅶ図版A・B-2	深鉢形	約11.2cm	I類1																																																	
4	第9図6 第Ⅶ図版A・B-6	深鉢形	約11.8cm	Ⅱ類																																																	
6	第9図5 第Ⅶ図版A・B-5	壺形	約4.6cm	I類																																																	
7	第9図14 第Ⅶ図版A・B-14	壺形	約4.1cm	I類																																																	
58	表25の8～13の 図版番号	<table><tr><td>8</td><td>第18図13 第XⅦ図版A・B-13</td><td>約5.4cm</td></tr><tr><td>9</td><td>第18図14 第XⅦ図版A・B-14</td><td>約5.6cm</td></tr><tr><td>10</td><td>第18図15 第XⅦ図版A・B-15</td><td>約7.2cm</td></tr><tr><td>11</td><td>第18図16 第XⅦ図版A・B-16</td><td>約7.8cm</td></tr><tr><td>12</td><td>第18図19 第XⅦ図版A・B-19</td><td>約3.6cm</td></tr><tr><td>13</td><td>第18図20 第XⅦ図版A・B-20</td><td>約4.0cm</td></tr></table>	8	第18図13 第XⅦ図版A・B-13	約5.4cm	9	第18図14 第XⅦ図版A・B-14	約5.6cm	10	第18図15 第XⅦ図版A・B-15	約7.2cm	11	第18図16 第XⅦ図版A・B-16	約7.8cm	12	第18図19 第XⅦ図版A・B-19	約3.6cm	13	第18図20 第XⅦ図版A・B-20	約4.0cm	<table><tr><td>8</td><td>第18図13 第XⅦ図版A・B-13</td><td>約5.4cm</td></tr><tr><td>9</td><td>第18図14 第XⅦ図版A・B-14</td><td>約5.6cm</td></tr><tr><td>10</td><td>第18図15 第XⅦ図版A・B-15</td><td>約7.2cm</td></tr><tr><td>11</td><td>第18図16 第XⅦ図版A・B-16</td><td>約7.8cm</td></tr><tr><td>12</td><td>第18図19 第XⅦ図版A・B-19</td><td>約3.6cm</td></tr><tr><td>13</td><td>第18図20 第XⅦ図版A・B-20</td><td>約4.0cm</td></tr></table>	8	第18図13 第XⅦ図版A・B-13	約5.4cm	9	第18図14 第XⅦ図版A・B-14	約5.6cm	10	第18図15 第XⅦ図版A・B-15	約7.2cm	11	第18図16 第XⅦ図版A・B-16	約7.8cm	12	第18図19 第XⅦ図版A・B-19	約3.6cm	13	第18図20 第XⅦ図版A・B-20	約4.0cm														
8	第18図13 第XⅦ図版A・B-13	約5.4cm																																																			
9	第18図14 第XⅦ図版A・B-14	約5.6cm																																																			
10	第18図15 第XⅦ図版A・B-15	約7.2cm																																																			
11	第18図16 第XⅦ図版A・B-16	約7.8cm																																																			
12	第18図19 第XⅦ図版A・B-19	約3.6cm																																																			
13	第18図20 第XⅦ図版A・B-20	約4.0cm																																																			
8	第18図13 第XⅦ図版A・B-13	約5.4cm																																																			
9	第18図14 第XⅦ図版A・B-14	約5.6cm																																																			
10	第18図15 第XⅦ図版A・B-15	約7.2cm																																																			
11	第18図16 第XⅦ図版A・B-16	約7.8cm																																																			
12	第18図19 第XⅦ図版A・B-19	約3.6cm																																																			
13	第18図20 第XⅦ図版A・B-20	約4.0cm																																																			
108	第3表の項目	<table><tr><th rowspan="2">土器</th><th>土厚 (mm)</th><th>1.0</th><th>5.0</th><th>6.0</th><th>7.0</th><th>8.0</th><th>9.0</th></tr><tr><th>層序</th><td>4.9</td><td>5.9</td><td>6.9</td><td>7.9</td><td>8.9</td><td>9.9</td></tr></table>	土器	土厚 (mm)	1.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0	層序	4.9	5.9	6.9	7.9	8.9	9.9	<table><tr><th rowspan="2">土器</th><th>器厚 (mm)</th><th>1.0</th><th>5.0</th><th>6.0</th><th>7.0</th><th>8.0</th><th>9.0</th></tr><tr><th>層序</th><td>4.9</td><td>5.9</td><td>6.9</td><td>7.9</td><td>8.9</td><td>9.9</td></tr></table>	土器	器厚 (mm)	1.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0	層序	4.9	5.9	6.9	7.9	8.9	9.9																				
土器	土厚 (mm)	1.0		5.0	6.0	7.0	8.0	9.0																																													
	層序	4.9	5.9	6.9	7.9	8.9	9.9																																														
土器	器厚 (mm)	1.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0																																														
	層序	4.9	5.9	6.9	7.9	8.9	9.9																																														
117	《註文献・注釈》 の(註1)	(註1)東恩納寛博...1964	⇒(註1)東恩納寛博...1964年																																																		
128	第1図伊武部貝 塚の位置 (中央の図)																																																				
132	左段の22行目	第2図4は口頭部に...	⇒ 第2図4は口縁部に...																																																		